

# 猿新聞

編集・発行者  
山村 準  
tel:0595-63-1725  
Email  
jyun.y@asint.jp

## ハナレザル管理対策

28年度では、名張A・B群の大量捕獲を実施され両群共に個体数は大幅に減少しています。だが、ハナレザル（オスグループ）に対しては、何の対策も立ててこなかったのは、一体どうしてでしょう。

人里に依存している群では、毎年、何頭もの人里生まれのオスが誕生します。オスはオトナになるといった群れを出て、ハナレザルになります。サルに限らず多くの野生動物には、近親相姦を避ける習性が本能的にあり、一定の時期が来るとオスは、その群れを離れ別の集団に入っていくます。

群を出たオスザルは、若いうちは、数頭のグループをつくって暮らしていますが、年齢がいくと単独（ハナレザル）で行動することが多くなります。交尾期が訪れると近隣の群れに接近し、その群れに追従しながらメスとの交尾の機会を待ちます。群のメスは、ハナレザルと交尾する

ことが多いらしいです。また、交尾期には、散発的に群れから離れていったメスが中心になり、その回りにハナレザルが集まってきて、新しい群れが形成されることもあるそうです。ハナレザルの一生は、群れから出たり別の群れに入ったり、群れに追従したり、群れとは独立して行動したりの繰り返しです。

悪い習慣を伝播し続けるのです。

それなのにこれまで、被害に苦しむほどの地域でも、ハナレザルに対しての管理対策は立ててきませんでした。今後は、このような観点から、群れ管理と合わせハナレザルの管理対策も重要と考えます。

※ハナレザル見極判断基準は、次に示す①②のいずれでも確認できれば群れ①メスザル②コザル

## シカを誘引する 冬場の緑草

秋はイノシシやシカの交尾期です。厳しい冬場を乗り越えて、春に出産を迎えます。

この時期の対策が最も大切です。餌の不足する厳寒期に集落周辺の餌を減少させることは、野生獣の増加を抑えるうえで極めて有効な手段と考えられます。山には餌の乏しい秋～冬にかけて、集落で青草などの餌がある

と、春に元気に生まれ、子連れのシカ、イノシシたちが、集落へ出沒するようになります。これが「非意図的餌付け」で、農作物の被害や個体数の増加につながっていきまます。

シカの生息数は、栄養状態がよければ毎年15%程度増えるといわれています。ところで、奈良公園のシカですが、国の天然記念物に指定されていますが、決して飼育されている動物ではありません。その個体数は1200頭前後で推移しているといわれています。きつと、これが奈良公園のシカたちにとって自然な数なのでしょう。

秋に1000頭のシカが生きていける餌があつたとしても、冬の餌量が100頭分しかなければ、シカは100頭以上には増えません。

1年の中で最も餌が少ない冬の餌量が、シカの生息頭数を決めるのです。つまり、冬場の餌を減らすことが最大のシカ対策なのです。そこで、冬期の集落周辺の雑草は青々とさせない。冬枯れ状態に！

シカが集落に出没する目当ては、農地の周辺にある雑草です。雑草を食べるために集落に出没して、目にとまった農作物を食べることによって農作物被害が発生するのです。雑草量を減らすことが大切です。草刈りは雑草の再生を助長します。秋に草刈りをする

## シカ肉は資源!

名張地域では、いま「サルよりシカがかわん」と、シカの被害が多発しています。昔の人たちは、けものも害獣ではなく、地域の資源と考え、里山の暮らしの豊かさのなかで共存してきました。昔は、シカやイノシシは猟師さんにとって大事な獲物で、江戸時代から「山鯨」と称して、大阪など街中で売られていて、狩猟により生態系のバランスが保たれていました。ところが最近では、シカやイノシシが増えすぎて、畑などの作物を荒らすようになってしまいました。畑だけでなく、残された自然林でも草や低木が食べつくされ、国土保全や水資源の涵養、絶滅の恐れがある植物や、そこに住む生物を守るために、増えすぎたシカをどうすればいいのかが問題になって

います。これは、いま私たちに突きつけられた大きな課題です。絶滅した狼などの代わりには、狩猟などで減らさないと自然のバランスを保っていけないという意見が大多数です。



昨年11月「とれたて名張」ジビエの振る舞い

現在では有害獣駆除として捕獲は行われていますが、大半が山に埋められたり、焼却処分されています。現状で、せっかくなの「命」を活かすという点では課題を残しています。



シカを解体する女性ハンター

鳥獣害の代表格であるシカを地域資源と捉え、有効活用を推進していくことを望まれます。シカによる被害を軽減するために、「山からの贈り物」として、シカの命を無駄にすることなく利用するといった考え方も必要ではないでしょうか。

被害を低減させ共存を図るには、激増した個体数管理（駆除）以外の道はありません。それには、生息密度、分布域、群れの構造などを十分にわきまえた個体数管理が必要で、乱獲は決して許されるものはありません。

シカなどの大型野生獣の獲りすぎは、たちまち絶滅の危機に瀕します。海外では「ジビエ」という高級食材として取引され、獲りすぎないようしっかりと管理のもと活用されているのですが、日本での活用はまだ試行段階です。ジビエ振興は、狩猟

を盛んにし、激減している狩猟人口の復活にもつながります。狩猟も釣り文化並に定着することが必要。獣肉を流通ルートに乗せるには解体施設、保健所の認可などクリアしなければならぬ高いハードルが数多くあり、行政の支援は欠かせません。政府は、処理加工施設の整備・改修など支援をしてい

ますが、地方行政も積極的にジビエ料理の普及拡大に取り組むことを期待します。野生鳥獣の肉は、他の食肉と比べ脂肪が少なく、低カロリー、高たんぱく、鉄分も豊富など、ジビエが見直されています。

昨年11月「とれたて名張」では、名張猟友会のシカ肉・イノシシ肉料理の振る舞いは、子供から老若男女が長蛇の列で、名張地方でもジビエの定着の兆しが見えています。

# 助けを求めるときに

というところは、その場所が

獣害に遭うと、誰もが誰かに助けを求めます。だが、全て他人任せでは良い結果は得られません。助けを求めるときに、まず、野生鳥獣を呼び寄せ、野生鳥獣を呼ぶ寄せている非意図的な餌をなくすことを考えましょう。

野生鳥獣の餌が豊富という事です。

鳥獣被害対策の基本は、集落ぐるみで協力して餌場をなくすことに尽きます。やみくもに、大がかりな柵を作った農作物だけを守っていても、食べられても困らない餌（非意図的餌づけ）があると、そこに居着いてしまい被害が拡大します。

「ちょっとくらいエエヤロウ」と思っているのはダメ。彼らはどうもどんエスカレートしていき集落全体が餌場になってしまいます。

まず、助けを求めるときに、他人任せではなく「自分の畑は自分で守る」という気概を持ち、被害対策の基本である、非意図的な餌づけ解消に取り組むべきです。一方、助けを求められた側にも考えてほしいことがあります。

霧囲気もある街ですが、同じ市内の中山間地域では獣害に苦しんでいる地区も多々あります。

平成26年の名張市広報配布地域数からの私感ですが、獣害影響地域はおおよそ65%と推察されます。

この65%の獣害影響地域の中には、自家菜園を楽しんでおられる新興住宅地の住民や、中山間地の住民の中にも名張の自然に魅かれ大阪などの都市から住居を代えた非農家の人たちも結構おられ、私もその一人です。

2000年に建てた自宅の周囲は自然環境の豊かな地域でしたが、当時、愛犬との散歩中、サルが出没し地区の野菜畑を荒らし追いついた口

野生鳥獣それぞれが、餌場と認識する一定の遊動域をもってその中で生活しています。その遊動域が餌量が豊富であれば、行動範囲は狭くなります。これを「居着き」といっています。反対に餌が少なければ、餌を求めて広い範囲を遊動します。

つまり、同じ面積でも餌量が豊富であればあるだけ、より多くの野生鳥獣が生きていくことになるのです。

したがって、集落や農地で獣害が発生する

餌場に乏しい野生動物のエリアに、私たちは塩を贈ってあげたいです。

近頃のシカの急増は融雪剤が一因だともいわれています。

車社会の現代、これは致し方ないことですが、未使用の融雪剤だけでも、シカの手の届かない所に保管するよう心がけましょう。

で、地域のなかから「そのイヌ又放してサル追っ払って」と要請されたのが、私が最初にかかわった獣害対策でした。

その後、サル追い払いが獣害対策の一方と非農家の私なりにサル害防止の意気を感じ、平成22年度に宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が認定する「野生獣追い払い犬IIモンキードッグ」を飼養しながら、毎日のイヌの散歩を兼ねた野生獣出沒防止パトロールを行い、居住地の一ノ井や隣接の矢川ではサル群れの出沒が少なくなってきたようです。

一昨年、名張市は中山間地でのシカやイノシシなどの獣害が絶えないためかメッシュ柵設置の補助を行い地区の農家が一体になって仕上げていきました。また、昨年度から宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が行ったサル的大量捕獲により名張B群のサル数が減少しました。しかしながら、これらは全く非農家の住民に周知されていないばかりか、残念ながら居住区では、柵設置の作業開始日すら知らされていないのが現状でした。

地域活動の一環として協働作業に参加し、非農家も獣害がより身近な問題と認識できたと思われれます。

私たちが目指す獣害対策の本来的な姿は、野生獣を拒絶するのではなく、荒廃した山林の復活、里山再生などに取り組み、彼ら野生獣との棲み分け、即ち共生社会を目指す方策を試行していくことだと考えます。

そのためには、高齢者の人手不足を補うためにも農家・非農家の別なく地域活動の一環として協働作業を行い、行政は資料提供だけでなく若い力の助力を得るための補助金交付も一考して頂きたいと思っています。

寄稿者 名張鳥獣害問題連絡会 会員・モンキードッグ会員【富山ひさ子】

は、農地に隣接する二次林の植生や植栽が、サルに食生活に大きく影響します。

タラ、ヌルデ、カキ、ニセアカシア、ヤマゲワなど広葉樹全ての冬芽がサルの食べものになります。

指導員による最近の報告では、伊賀竜口への出沒が異常に多く、何かあるのではと、現地取材（2月16日）。AM10時到着。突然カツ、カツ：と、強烈な受信音と共に親ザル1頭子ザル2頭出現。地元民によると、5頭程が居着いているとのこと。

一時間ほど滞在したが追い払い行動はなかった。食害作物が少くサルに対する関心が最も低い季節だ。植生も一般的で、植栽も特段サルを誘引するような物はない。延いて言えば、桜並木とユズ畑（収穫済み）があるくらい。

桜並木の冬芽は、まだ固いが、それを狙っているのかも？

## チョット一服

### 融雪剤がシカを増やす！

家畜として飼育されている牛など草食動物は、人為的に塩を摂取させることが出来ますが、野生の草食動物はどうやって塩分を摂取しているのでしょうか？

土中に微量にあるミネラル分や、温泉地帯・石灰岩・岩塩の多い地帯へ行く・海に行くなどして塩分補給をするようです。

最近の野生のシカなどは、山奥の建造物に使われているコンクリートの中にある塩成分をなめて塩分を摂取することがあるようです。

足に付いた土を水場に溶かし塩分を摂取したりもするそうです。このように野生のシカ達は塩分の摂取に苦勞をしています。草食動物は塩分なしでは生きていけな

多くの人が必要だっただけです。地域をあげて非農家世帯にも「柵設置協力の出合い要請」を呼びかければ、

地域内の柵の設置は多くの人が必要だっただけです。地域をあげて非農家世帯にも「柵設置協力の出合い要請」を呼びかければ、



伊賀竜口にて 29年2月16日

のです。反面、肉食動物は、捕食する獣肉から塩分を補給しています。

私たちが、いま、何気なく便利さにかまけて散布している融雪剤（凍結防止剤）は、塩化カルシウムだから、化学的な人工の「塩」です。

塩分に乏しい野生動物のエリアに、私たちは塩を贈ってあげたいです。

近頃のシカの急増は融雪剤が一因だともいわれています。

車社会の現代、これは致し方ないことですが、未使用の融雪剤だけでも、シカの手の届かない所に保管するよう心がけましょう。

で、地域のなかから「そのイヌ又放してサル追っ払って」と要請されたのが、私が最初にかかわった獣害対策でした。

その後、サル追い払いが獣害対策の一方と非農家の私なりにサル害防止の意気を感じ、平成22年度に宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が認定する「野生獣追い払い犬IIモンキードッグ」を飼養しながら、毎日のイヌの散歩を兼ねた野生獣出沒防止パトロールを行い、居住地の一ノ井や隣接の矢川ではサル群れの出沒が少なくなってきたようです。

一昨年、名張市は中山間地でのシカやイノシシなどの獣害が絶えないためかメッシュ柵設置の補助を行い地区の農家が一体になって仕上げていきました。また、昨年度から宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が行ったサル的大量捕獲により名張B群のサル数が減少しました。しかしながら、これらは全く非農家の住民に周知されていないばかりか、残念ながら居住区では、柵設置の作業開始日すら知らされていないのが現状でした。

多くの人が必要だっただけです。地域をあげて非農家世帯にも「柵設置協力の出合い要請」を呼びかければ、

野生鳥獣それぞれが、餌場と認識する一定の遊動域をもってその中で生活しています。その遊動域が餌量が豊富であれば、行動範囲は狭くなります。これを「居着き」といっています。反対に餌が少なければ、餌を求めて広い範囲を遊動します。

つまり、同じ面積でも餌量が豊富であればあるだけ、より多くの野生鳥獣が生きていくことになるのです。

したがって、集落や農地で獣害が発生する

餌場に乏しい野生動物のエリアに、私たちは塩を贈ってあげたいです。

近頃のシカの急増は融雪剤が一因だともいわれています。

車社会の現代、これは致し方ないことですが、未使用の融雪剤だけでも、シカの手の届かない所に保管するよう心がけましょう。

で、地域のなかから「そのイヌ又放してサル追っ払って」と要請されたのが、私が最初にかかわった獣害対策でした。

その後、サル追い払いが獣害対策の一方と非農家の私なりにサル害防止の意気を感じ、平成22年度に宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が認定する「野生獣追い払い犬IIモンキードッグ」を飼養しながら、毎日のイヌの散歩を兼ねた野生獣出沒防止パトロールを行い、居住地の一ノ井や隣接の矢川ではサル群れの出沒が少なくなってきたようです。

一昨年、名張市は中山間地でのシカやイノシシなどの獣害が絶えないためかメッシュ柵設置の補助を行い地区の農家が一体になって仕上げていきました。また、昨年度から宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が行ったサル的大量捕獲により名張B群のサル数が減少しました。しかしながら、これらは全く非農家の住民に周知されていないばかりか、残念ながら居住区では、柵設置の作業開始日すら知らされていないのが現状でした。

野生鳥獣それぞれが、餌場と認識する一定の遊動域をもってその中で生活しています。その遊動域が餌量が豊富であれば、行動範囲は狭くなります。これを「居着き」といっています。反対に餌が少なければ、餌を求めて広い範囲を遊動します。

つまり、同じ面積でも餌量が豊富であればあるだけ、より多くの野生鳥獣が生きていくことになるのです。

したがって、集落や農地で獣害が発生する

餌場に乏しい野生動物のエリアに、私たちは塩を贈ってあげたいです。

近頃のシカの急増は融雪剤が一因だともいわれています。

車社会の現代、これは致し方ないことですが、未使用の融雪剤だけでも、シカの手の届かない所に保管するよう心がけましょう。

で、地域のなかから「そのイヌ又放してサル追っ払って」と要請されたのが、私が最初にかかわった獣害対策でした。

その後、サル追い払いが獣害対策の一方と非農家の私なりにサル害防止の意気を感じ、平成22年度に宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が認定する「野生獣追い払い犬IIモンキードッグ」を飼養しながら、毎日のイヌの散歩を兼ねた野生獣出沒防止パトロールを行い、居住地の一ノ井や隣接の矢川ではサル群れの出沒が少なくなってきたようです。

一昨年、名張市は中山間地でのシカやイノシシなどの獣害が絶えないためかメッシュ柵設置の補助を行い地区の農家が一体になって仕上げていきました。また、昨年度から宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会が行ったサル的大量捕獲により名張B群のサル数が減少しました。しかしながら、これらは全く非農家の住民に周知されていないばかりか、残念ながら居住区では、柵設置の作業開始日すら知らされていないのが現状でした。

## 獣害に対する非農家の関わり方

### 寄稿文

我が名張は自然豊かな

ケット花火があがる中

菜畑を荒らし追いついた口の

追いついた口の

追いついた口の

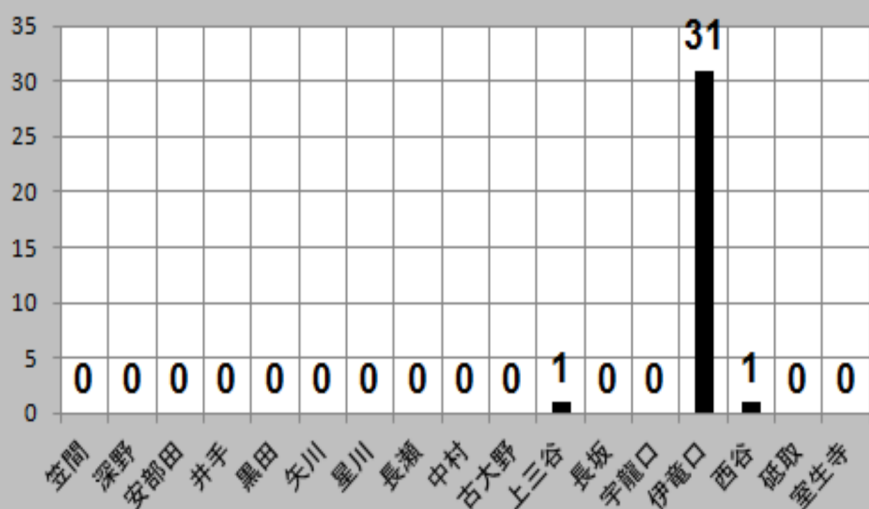
追いついた口の

追いついた口の

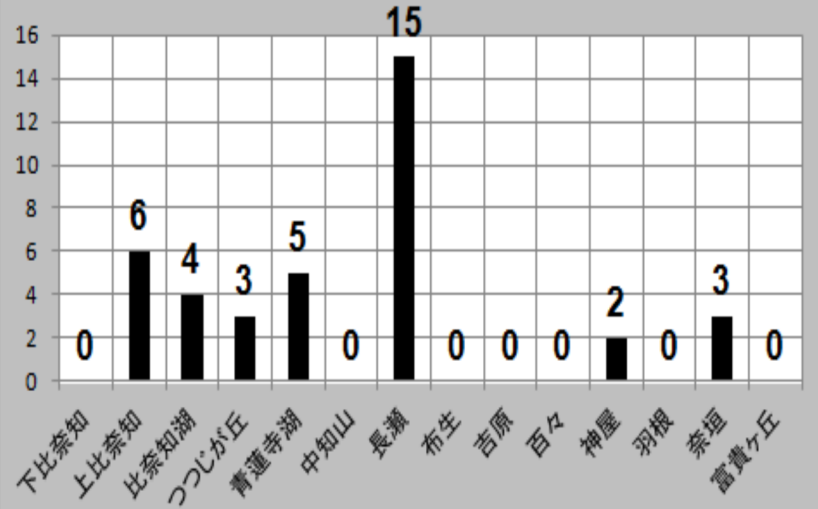
追いついた口の

追いついた口の

名張B群出沒回数グラフ(平成29年2月)



名張A群出沒回数グラフ(平成29年2月)



- 名張鳥獣害問題連絡会 発行部数
- 錦生地区：100部
- 赤目地区：200部
- 箕輪地区：70部
- ひなち・富貴ヶ丘：160部
- つつじが丘：430部
- 市民センター：120部 (10地区)
- 名張市議会：20部
- 名張市役所：20部